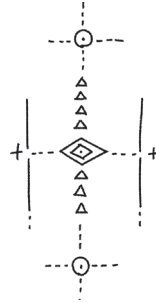


COSMOS集



水上 比呂美選

「あすなる集」特選

アラン・ドロンの横顔

萩原栄子 埼玉

「太陽がいっぱい」のアラン・ドロンの横顔に「ダビデ」重ねし高校生我
 ちちははを偲べば常によみがへるここぞと想ふ映画のシーン
 雷蔵の光源氏と寿美花代の藤壺美しき大映映画
 休耕田の四角の中におだやかなピンクの風をふふむコスモス
 うなふ人の無き悲しみを思ひたり薄はかりの土手下の畑

古代蓮

内山春美*千葉

のぼる日にちから授かり古代蓮宝珠のごときつばみ解ききゆく
 咲き初めし紅大賀蓮よ耳をよせ古風をそと聞かまほし
 吹きぬける南風に蓮葉は濃き淡きウェーブとなりて澳にひろがる
 黒みおび立ちたるはちすは潜望鏡晩夏の蓮田をながめいるらむ

鶯の四方より交わすさえずりに聴耳頭巾かぶりてみたし

山友恋いし

小島りき子*神奈川

台風に旅阻まれてでつばなしのアドレナリンを沈める雨音
 台風の間隙の陽ざしに大き虹見知らぬ人に教えあう朝
 山あいに見ゆる夕焼が田にうつるふるさとの景となりのトトロ
 診察を終えし直後に急逝せし友のただちや豆が翌日届く
 頬なでる風の涼しさ山恋いし溪谷恋いし山友恋いし

加賀ノ月

人見江一*神奈川

「認知症予防のためだ、赤ワインなみなみ注げ」が父の言いぐさ
 美しいやまとことばに言い換える「ゲリラ豪雨」はさながら「鬼雨」か
 八月の新聞記事を切り抜いて高石ともやの訃報に気づく
 名月を愛でて飲む酒「加賀ノ月」能登復興を祈り酔う酒
 美しい雨のことはにそぐわない「ゲリラ豪雨」は戦さの言葉

元日の地震

奥浩昭 東京

ひぐらしの聞こえずなりてなほ曇き時を聞こえ来チャンキおけさ
 うちなびく草原に立つ少年のクラブに高きボール入る音
 とほき日に三味線の音ながれるし隣の家は解体されぬ
 元日の地震につぶれぬ奥能登の上時国家の広き母屋は
 時々川音高くみづくきの流れ変はれる川の転調

大野 英子選

釣瓶の音 富永 弘 東京

買ひもののメモ確かめて昼すぎの茶房にひとりコーヒーを飲む
悪かつたなあと謝りたき人を思ひ出づるも今かく老いて
水をはるバケツに足を入れ盛夏しのぎぬ戦後のプレハブ庁舎
からからと釣瓶の音が谷間にこだましてゐき母の生家は
馬鈴薯の芽のさみどりに触れてみつ暑き夜中に水のみに来て

安曇野の空 本土和子*東京

おたがいに湿布貼りあうふたり旅姉との時間ゆるゆると過ぐ
姉は肩わたしは腰と貼りあえる湿布しんしん沁みる旅の夜
安曇野の空の青さは深すぎてわが眼の奥はつんとはじける
わたしってこんなに素早く動けると驚いている寝過ごした朝
舌のうえで溶けゆくビターチョコレートあの日のわたしを少し悔やめり

呼び合ふ声 星 キイ 新潟

「久しぶり」とマスクの顔をあげる女に脳がフル回転す
西日本に台風十号あすわりて被害が続く真夏日つづく
温暖化を意にも介さぬトランプの大統領選の討論会みる
夜明けまち畑に出て来るミイ子さんあねさ被りがしつくり似合ふ
萩ゆれて夕焼け小焼けのチャイム鳴り「またね」と呼び合ふ声はそら耳

聞き役 四谷 範 富山

「筋肉は裏切らない」に期待してエアロバイクをララララ漕ぎぬ
友からの絵手紙にある唐辛子鮮やかな赤に秋を感じて
聞き役も忍耐要りてわが気持おさへ押へてじつと聞きます
この夏の忘れものありスタジアムの並木の合歓の花盛り見ず
土曜日が半ドンなりしあの頃は映画観るのが楽しみだつた

足場組む音 山田 一 弥 岐阜

眠剤と酒をやめたり暑き夜の吾の本能を麦茶が癒す
岐阜高島屋四十七年の幕を閉づあまたの人の背中さびしげ
ぎふ花火に能登の復興を願ひをり被災花火師の大輪も咲き
ひさしぶりに子ら八人が帰省せりむかへて楽し酷暑の盆に
打ち響くしづかな町にかんかんと災害補強の足場組む音

原賀 櫻子選

まるがほ派 池田 あつ子 愛知

まるがほが多数派占める我がうからその中心に母百一の賀
くりかへす猛暑と豪雨の今夜あたりノアの方舟発つやもしれず
大型の台風来ると買ひだめて昼は菓子パン夜はレトルト
虻がきて蝶々がきて花芙蓉たのしかつたと夕べ萎るる
仲間らと歌を詠みあふカフェのすみ片翹とづるグランドピアノ

ノックのリズム

岩 館 澄 江*愛 知

そのリズムならばあけます我々の我々だけのノックのリズム
原っぱにねっころがつて雑草のザツのひとつになりたいたし
いつもいるバッタはたぶん知ってる子 赤ちゃんだったころにも会った
水蛸とメロンのみどり溶けこんだスूपつめたくなるおうからだ
前回の鼻血のときはわたしまだセーラー服をたしか着ていた

一時 帰宅

奥 村 幹 男*愛 知

夕暮れの茶房は客もまばらにてジャズのベースがゆったり響く
草刈れば不意に湧き出すアキアカネタ焼け色の胴体映えて
雨の日の雨音が好き草刈りも畑仕事もしなくてもいい
休日の影はいつからこんなにも薄くなつたか高齢者われ
施設より一時帰宅の父を容れ家は黙っておかえりという

設定 温度

三 浪 治 子 三 重

人物の死を描くときは香焚くと大石静氏笑顔で語る
「持つて行く？」草とる媪が剪りくるる千日草の健やかな紅
台風の長期滞在、畑土を深くうるほし大根めばゆ
中天の寝待の月や峰雲もしのめ色に染まるたまゆら
リモコンの設定温度を一度上げ ついに来ました優しい朝

呉 湾

樺 か 乃 広 島

叩くやうな真夏日のもとと神妙に息子自慢をききてゐるなり

この路地は風の道なり塀越しにひよいひよいと凌霄花
何かする気力をうばふ猛暑にも平常心なる鸚哥の囀り

「いつか分かる」父が度々口にした「いつかわかる」を今ならわかる
呉湾に沈む夕日を車窓より見てゐるだけの今日の収穫

水上 芙季選

われの体積

落 合 美代子 香 川

目を開けても片足立ちはもう出来ぬわづか三秒がまんが足りぬ
どうしたか米の売り場に米が無い令和六年八月のこと

あびるほどひつきりなしに飲みました水分補給のレモンスカッシュ
背の丈が去年よりもまた一センチ縮みてわれの体積も減る
吾の好きな海のとおりといふシーチキン不気味なものと高野氏言へり

夜中の日記

松 岡 綾 子 香 川

台風接近飛行機欠航東京で今夜の宿を一人探すべし

駅員にアプリを見せて位置確認おひとりさまのお上りさんわれ
悔なくと看取り気負ひし半月が嘘だつたやうな母の回復
「偽り」は自分の為についた嘘夜中の日記で修正しておく
あと一首コーヒー淹れて部屋冷やしいざ籠らむか我が石山寺

鯛

石 本 洋 子 佐 賀

畑中の茄子も蕃茄も枯れ果てて雑草のみが炎天に伸ぶ
午後九時の厨の窓を開けたれば鈴虫が来て鈴の音聞かす

夕刻に鯛を素手で洗ひたり夜中まで掌は鯛のほひす
午前五時有明の海を刃物にて切り裂くさまに小舟が走る
鰻屋の障子を繰れば真白なる芙蓉咲きをり花も馳走と

秋 茜 酒 井 恵 子*長崎

台風にもバスも電車もとめられて轟音なくて街はねむること
早朝の墓所の草抜く頭上には父母を想わす秋茜二ひき
八月の曆に記す新盆の日親しきひとの三人逝きたり
地下鉄の入口数多つくられてわれの知りたる博多は遠し



大松 達知選 「その二集」特選

紙 香 水 くだう れいん*岩手

コーヒーを淹れる手を止めもし竜になつたら何色か考えた
人妻になつたと思う冷凍の骨付き肉を三本掴み
わたし、わたしに厳しいのかしら 雑炊ののちの鍋底洗う
満月が徐々に大きくなつてきてあなたとわたしだけ気付く夢
いじわるとわたしを褒める手紙には紙香水が挟まつていた

エアコンのガンガン効いた居酒屋で初めて食べるもつ鍋うまし
大きな部屋 田 中 司 郎 鹿見島

臥す妻にやつと作れる目玉焼宝のごとく鍋から皿へ

鍋囲み顔突き合はせともに食す大きな部屋の湯気の立つ中
鍋洗ひ一個一個をていねいにねぎらひ仕舞ふ大晦日の夜
抜け落ちて手にまとひつく銀髪に秋風そよと通り抜けけり
紫陽花がつつぎ咲くことと交信のことは湧き出づるラインの画面

わたしはゐます 谷 川 恵 崎 玉

コスモスの種蒔くひとと庭にゐる今年最後の大葉を摘みぬ
パリ五輪終はりしころにパリにゐた一年半をちくんとおもふ
バゲットのサンドイッチのあの硬さ思つてたべる納豆ごはん
引き算をしないと歳がわからない 秋の夜にはちやうどいい嘘
食欲の余れることが証左なり 今、ここ、秋にわたしはゐます

ミルフィーユ 谷 真 樹*神奈川

雨粒にうたれるままにうつくしき怒りささげるガドルフの百合

わたしなら気分じゃないし重いからことわっちゃうな受胎告知は鉄柵にひとしくならぶ蜻蛉らはなにの喩なのか翅うつくしく嘘つきのミルフィーユには容赦なくフォークをさしてなかみを晒すほとぼりが冷めたころだともどつても許しはしない裂ける実柘榴

安全な家

新美 亜希子* 神奈川

虫はきつと 台風露を飲むでしよう 声がつやつと聞こえるでしよう 死んでなおどうしようもなく蛇だから くねくねするよりしかたがないか 二千年前二十四になる若者も砂漠の上で悩んだんだね 回つて、振り回されて、見つめる 時計、台風、連獅子、椰子の木 私だけ安全な家にいるつもり 遠くで子どもが車ぶつける

駄目にする午後

松下 誠 一* 東京

三日目の湯船のようにしろい塵浮かぶ新河岸川に住む鯉 昼ごろになって眠気がくるまではさみはひとりの部屋に伏すのみ 川の面につま先をはずかにあてて水面にうつる月ゆがませる 県境の橋にからだを乗りだせば死ぬ気の失せるほど黒い川 さがみがさみを駄目にする午後。黄みがかる抗うつ剤の二錠をあける

田宮 朋子選

秋の大祭

桜井 奈穂子 新潟

横浜を夜中に発ちて中山道、三国街道はしり来る吾子 転職をひかへゐる子は引き継ぎの電話に応ふ食事する間も

宝曆のころより縷々と継がれ来しうぶすなの宮の秋の大祭 信濃川舟運に富む城下町のまつりの屋台豪華絢爛 舟運に栄えし町の豪商の寄進なりとふ屋台三台

ベビーはねんね

鈴木 美恵子* 長野

時計の針コチコチカッチン歌つてる静かにしてねベビーはねんね ようやくいま暑さが引いて一息す母への便りのペンのかるやか 稲稔りなでしこ揺れる秋彼岸祖先を偲び香を手向ける

獲れたての野菜を届けて下さった友逝くシニアカーを残して 土作りを教えていただくはずでした友はもう亡く秋風の吹く

買い物のカート

鏡 康 男* 三重

レジ籠の吾を追いやり買物のカートのさばるバーゲンセール 買物のカートにヒヤリハットするわき見運転ばかりの通路 買物に交通ルールあればいい大型小型のカート行き交う 雲出川に沿って遡上す標高は三百メートルほくのふるさと 知る人の少なくなりしふるさとにまた一人逝く今朝の新聞

9・11

中村 泰子* 京都

アイオワへ四十年を飛びこえて我を連れゆくズッキーニブレッド 9・11無言で友と立ちすくみきハドソン川の向こうの崩落 立ち昇る煙の行方をじつと見た臭いとあの風 9・11 隣のジョンは理由さえ知らぬまま粉塵となりき同時多発テロ 生地広げハサミをいれる恐ろしさ大海原へ一人発つごと

初秋の匂い 川田 ゆかる*大阪

金曜はスーパールールを一万個ばら撒いたような夏の居酒屋強風で傘はぱつとひるがえり雨水溜めるカップの形状
休日の静かな午後の流れくるどこかの階の夫婦の喧嘩
閉じたエレベーターに手をのばす銃撃つときと同じポーズで
具体的物質名には変えられない雲あらわれて初秋の匂い

狩野 一男選

イケオジ紳士 高浜 莉乃*兵庫

今の世はモラハラパワハラハラハラハもつと自由に生きたい私
ロマン派のショパンやリストの音楽は自由を愛する詩人と魔術師
憧れだオーブンカーのBMWイケオジ紳士がさらりと手を振る
軽々と棒を飛び越え新記録爽やかボーイなデュプランティス選手
スタートのピストル音を待つ選手の心音までが聞こえてきそう

仁淀ブルー 山添 聖子*奈良

一枚の木の葉になりて浮かびたり八月の仁淀川のカヤック
透明の水重なりて青となる仁淀ブルーの明るき深淵
すぐそこに見えるのに手の届かない仁淀ブルーの水底は宙そら
宿題の途中ソファーに眠る子よブルーのあとは少し幼い
長谷寺の石段横のせせらぎに棲むさわがにのはさみのひかり

稲のふりして 新 敦子 鳥取

備蓄米放出せぬと大臣のもつともらしき会见寒し
スーパールールに米の品切れ続く日よ大臣殿に備蓄米請ふ
米作りやめて二年目の田に稗や粟の育ちぬ稲のふりして
耕作をせぬのに作業賃金の協定表来て曆に貼れり
笑はせて考へさせる研究の「豚はお尻で呼吸ができる」

羊蹄山 秋山 美江 愛媛

還暦も軽く踏み越え今年また登山計画ルルララン
まつすぐに延びゆく道ぞ蝦夷富士は裾野広げて空にそびえる
下山する人に励まされ九合目そこにある空限りなく遠し
真青なる空に突き立つ頂きの標識に手を置きて噛み締む
羊蹄山空広きこと青きこと人に遅れて登り五時間

手抜き心 間 由美子 長崎

気がつけば冷房つけて部屋にをりベランダに出る勇気がなくて
膝、腰のサプリメントの広告について目がゆく心がゆれる
部屋すみの綿ごみ見ても見なかつたと言ひ聞かせをり手抜き心が
このころは掃除機かける回数がめつきり減りぬ膝、腰痛み
以前ほどまめに手が出ずなりにけり汚れくらゐで死にはしないと